

かささぎ

通信 第88号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 1月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年十二月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（1996年、刈谷市教育委員会）所収の「夜長物語」を読みました。

新年明けましておめでとうございませう。

「夜長物語」（初出、筆名菅沼七郎、『赤い鳥』一九三二年二月号）は、ねずみ浄土の餅つきやねずみ軍を従えた大黒様と海の魚類・貝類などを味方にした恵比寿様の合戦、そして布袋様による和睦を描いた作品です。子年の二〇二〇年の初めに報告するのにぴったりの作品でした。

この作品は江戸時代初期（慶長以降）に著された御伽草子「隠れ里」を子供向けに書いた作品だということが分かりました。森三郎が『赤い鳥』に「夜長物語」を発表する四年前（一九二八年）に島津久基（一八九一—一九四九）が『近古小説新纂』という本の中で、初めて「隠れ里」を活字化して紹介しています。三郎がこの本を参考にしたことは間違いないでしょう。「夜長物語」は子ども向けに紹介された最初の御伽草子「隠れ里」であつたと思われまふ。三郎はこの御伽草子を子供向けに書き直すにあたって、主人公に「片野少将」と名前を付けました。秋の半ばの月の良い晩に、片野少将が都のはずれの自分の屋敷の縁先で月を眺めているうちにうとうとし、夢を見ます。その夢の内容が冒頭で紹介したねずみにまつわる長い話なのです。ふっと目覚めると少将は初めの自分の屋敷の縁先について、よほど長い時間がたつたらしく、月がもう嵯峨野の果てへ沈もうとしていたと、現実に戻って話は終わります。

その仕組みが分かるように三郎はこの話に「夜長物語」という題名を付けたのでしょう。もともと御伽草子には「秋の夜の長物語」という類似の題の作品があり、秋の夜に集まった人々に、一人の僧侶について長い話を語る内容です。

さて「夜長物語」の中の夢の内容は、片野少将が月に誘われて散策するうちに歌声に導かれて大きな洞穴に入り込むと、昔話「ねずみ浄土」にある世界が広がっていったところから始まります。原文では「半町ばかり行かと思へば、さしもひろき所に出たり」となっている部分を三郎は「ものゝ半町ほどもいきますと、穴の中は急にあかるくなつて、間もなく広々した平地へ出てきました」としています。実は『赤い鳥』より十一年後に円地文子が『御伽草子物語』（小学館、一九四三年）を著し、「隠れ里」を子供向けに発表しています。その中ではこの部分を「およそ半町ばかり来たと思ふころ、きふにまはりが、かあつと明かるくなつて、ひろびろとしたところへ出ました」としています。円地も『赤い鳥』のこの「夜長物語」を目にしていたのではないかと気がします。円地訳では穴の中で自分の体が不自然に大きくて目立たないように、ねずみに変身しています。しかし三郎作ではそのまま片野少将の姿でねずみに分らないようにしています。

話は隠れ里のねずみたちの所へ来た早馬の使者の報告で、大黒軍・恵比寿軍の合戦の話に移ります。原作では使者は隠れ里のねずみ達に劣勢の大黒軍へ加勢の要請をし、ねずみ達は戦場に馳せ参じます。三郎作ではその要請があつたか定かになつていません。合戦物の勢いを当時の読者の子ども達もハラハラしながら読んだことでしょう。しかし折よく中国から来合わせた布袋和尚の仲介で和睦し、祝宴が開かれます。片野少将もその酒宴を覗き見ます。そして布袋様と大黒様の相撲が始まり、行司の恵比寿様の「かつたかつた」の声で、目が覚めることとなります。めでたい福の神の相撲で一年が始まったところで、今年も楽しく作品を読んでいきたいと思ひます。

次回「森三郎の作品を読む会」 二〇二〇年二月十四日（金）

午後一時半～三時半

「一人相撲」『森三郎童話選集 夜長物語』所収